

第6回（平成26年度）「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 京都環境文化学術フォーラム「国際シンポジウム」開催概要

1 日時

平成27年2月7日（土）

■「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 午後1時～2時10分

■京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム 午後2時30分～5時

2 場所

国立京都国際会館 メインホール

3 内容

（1）「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式

畠山 重篤 氏（NPO 法人森は海の恋人 理事長／京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授）を第6回殿堂入り者として顕彰し、認定証及び記念品を授与しました。殿堂入り者からは記念スピーチを頂戴しました。



会長式辞



認定証の授与



記念品（風神雷神図（西陣織授与））



記念スピーチ

(2) 国際シンポジウム

『「森里海」から「地球」を考える。』をテーマにシンポジウムを開催しました

ア 記念講演「森は海の恋人～人の心に木を植える～」 畠山 重篤 氏



東日本大震災により壊滅的な被害を受けた気仙沼湾の復活の様子や、これまで取り組んでこられた活動について講演されました。

海の環境を守るには、海に注いでいる川、またその上流の森を守ることが重要であることを科学的に説明し、海だけではなく、流域全体を見て環境を守ってきたこれまでの活動が、気仙沼湾の復活を早めた要因である旨を述べられました。

イ パネルディスカッション



〔パネリスト〕

畠山 重篤 氏（殿堂入り者）

C. W. ニコル 氏（作家／ナチュラリスト）

杉本 節子 氏（料理研究家（食文化研究家）／
（公財）奈良屋記念杉本家保存会常務理事兼
事務局長）

山極 壽一 氏（京都大学 総長）

〔コーディネーター〕

阿部 健一 氏（総合地球環境学研究所 教授）

（パネリスト）



ニコル氏：黒姫の我々の森には、多様な生物が生息するようになり、絶滅危惧種も52種類戻っています。この森は教育の場でもあり、癒しの場でもあります。特に心に傷を持った子供達は、自然に触れることが一番です。自然にたくさん触れて、五感を使わないと脳の発達もおかしくなり、「自然欠乏症候群」になってしまいます。日本にはたくさん自然があるのにちゃんと生かせていないのが、もったいないです。



杉本氏：京町家の庭は、「市中の山居」の思想に基づいて緻密に人工的に設計して暮らしに憩いを取り入れており、私はこの庭からいろいろなことを感じながら自然を与えられて成長してきたのかなと感じております。その庭からは、遠くの天気を空気の香りで感じ、四季の移り変わりも感じることができます。自然からもたらされる生命の危機に対処するためにも、京都の人は町家を作り、その中に緻密に設計された庭というものを作ってきたのではないかと感じております。



山極氏：日本では、裏山にいろいろな動物が住んでいても、見たことがない子供達が多いですが、コンゴ民主共和国でも同様に、ゴリラが近くに住んでいるのに、子供達は見たことがないのです。これが世界の現実です。生物多様性の保全のためには、まずはきちんと知らなければいけない。また、生物同士の繋がりを知って、大きなスケールで命の繋がりを知らなくてはなりません。フィールドワークや実験を通じて、そういうことを実践していきたいと考えています。



畠山氏：私の所で京都大学の学生を10年間受け入れています。釣りをしたり自然に触れたことのない学生が多いです。我々にとっては当たり前の生活だけれども、インターネットにない世界を彼らが体験することで、いろいろな変化が起きるのではないかと期待しています。

(コーディネーター)



阿部氏：第2回殿堂入り者の原田先生が「例えば、魚の専門家と言えば水産学部の先生を思い浮かべるかもしれないけれど、それは違う。魚屋のおばさんも水俣の漁師も魚の専門家です。それに早く気がついていたら水俣病なんて起こらなかっただろうね。」と言ったことを思い出しました。ここの会場にいる皆さんが恐らく環境問題、地球環境問題の専門家です。環境問題とは極めて日常的なもの、一人一人が実は専門家にならないといけない、ということをおもいました。